



# 年次報告書 2017

特定非営利活動法人  
エイズ孤児支援NGO・PLAS



# 目次

1. 2017年度の振り返りとお礼
2. 理事のごあいさつ
3. なぜ「エイズ孤児」を支援しているのか
4. プラスのビジョン
5. 現地の人々のちからを信じて－わたしたちが取り組んでいること
6. 食品販売によって母親たちの自立を [ウガンダ]
7. HIVに影響を受ける女性たちが本当に改善したい課題 [ウガンダ]
8. シングルマザー家庭の経済力を高めるために [ケニア]
9. 乾燥した土地で環境に優しい持続可能な生活を [ケニア]
10. 子どもたちが健やかに育ち未来を切り拓くために [ケニア]
11. 事業の成果を測定しています
12. 支援者のみなさんと活動をつくる
13. エイズ孤児の問題を広く市民へ伝える
14. 活動の成果と課題をお伝えする「ご支援者様Thanksパーティー」を開催
15. 市民のみなさまと活動をつくる
16. 成果を生む持続可能な組織
17. チャリティーオークション
18. ご支援いただいた法人のみなさま
19. 写真で振り返る2017年度
20. 会計報告



## 2017年度の振り返りとお礼



代表理事  
門田 瑠衣子

本年も多くの応援、ご支援を賜り誠に有難うございました。今年でプラスは11周年をむかえました。現場では多くのエイズによって影響を受ける子どもたちが支援を求めている中、どのような人たちに支援を届けるべきか？限られたリソースの中で、必要とする人へ効果的に活動を行っていくための試行錯誤を続けてきました。エイズによって夫を亡くしたシングルマザーと遺されたエイズ孤児たちを中核として、家庭の生計向上支援とキャリアプランニングの支援を届けることで、その子どもたちが教育を受け、前向きに将来を考えることができるよう、活動を行ってきました。活動していく中で少しずつノウハウがたまり、成果もみえてきました。今後さらにこの活動を広げていくために、引き続きの応援をどうぞよろしくお願い致します。

# 理事のごあいさつ



事務局長理事  
小島 美緒

私たちが活動するウガンダとケニアにはそれぞれ100万人を超えるエイズ孤児がいます。18歳未満の子どもの数はウガンダで約1,700万人、ケニアでは約2,100万人で、15～16人に1人の子どもがエイズに影響を受けながら生きています。子どもたちが直面する問題は簡単には解決できません。そんな中、2017年度は日本と現地ですらなる「オーナーシップマインド（課題を自分事として、情熱や意思を持って取り組む姿勢）」が広がった1年でした。現地パートナー団体を訪問したとき、どの団体も「自分たちの地域の課題を自分たちで解決したい」と語り、地道に活動を続けていました。日本では、ボランティアやご寄付、企業活動など様々な形でプラスに参加される皆さまの輪が広がりました。これからもプラスは、現地と日本それぞれの力をあわせてエイズに影響を受ける子どもたちのために活動を続けてまいります。

小島 美緒



理事  
一宮 暢彦

プラスの活動に関わる皆様へ心から御礼申し上げます。普段は民間セクターで働く私ですが、今年春から生活の拠点をウガンダの隣国、ルワンダに移し、同国のITスタートアップ企業で働いています。その中で、改めて世間のアフリカの捉え方が大きく変わってきていると肌で感じます。ビジネスのコンテキストが語られることがプラスが活動を始めた時よりも圧倒的に多くなり、「ビジネスでしかアフリカの問題を解決することができない」という論調すらあります。それでもプラスの事業地を訪問すると営利事業の形態を取るとなかなかリーチできない社会問題があると認識させられます。またHIV/エイズの問題についても世界の潮流としては、薬の開発が進み、改善の方向に向かってはいますが、事業地で話を聞くとエイズによって親を失い、難しい環境におかれている家庭・子どもたちが多くいます。このような世の中の潮流が、取り組む問題と反対に行くほど、その問題の解決に取り組むNGOの真価が問われる時だと思えます。大きな流れの変化の中で、自分たちの存在意義、社会でのありかたを再定義し続け、活動に関わる全ての人が前向き（Positive Living）に課題解決に向かえる環境を作り続けてまいります。

一宮 暢彦

## 新たに3名の理事を迎えました

団体設立から11年を超え、さらに活動を発展させていくため、設立当初から参画している5名の理事に加え、既存理事とは違った視点を持ち、それぞれの専門分野でご活躍されている以下の3名の理事を2016年12月より招聘することとなりました。（50音順）

- 加藤琢真さん（長野厚生連 佐久総合病院国際保健医療科/慶應義塾大学小児科学教室）
- 功能聡子さん（ARUN合同会社代表、NPO法人ARUN Seed代表理事）
- 長浜洋二さん（株式会社PubliCo（パブリコ）代表取締役）

新理事の皆さまには、専門性を活かし、プラスの組織運営に携わっていただきます。設立からの思いは大切にしつつ、更に安定した運営のできる強い組織となり、現地のエイズ孤児たちの課題解決に向けて今後も活動してまいります。引き続き、設立メンバーでもある常任理事5名もそれぞれの経験値を生かしながら理事会を運営していきます。



## なぜ「エイズ孤児」を支援しているのか

わたしたちとエイズ孤児との出会いは2005年にさかのぼります。当時学生だったわたしたちはボランティア活動で訪れたアフリカでエイズ孤児の存在を知ることになります。お父さんとお母さんをエイズで亡くし、親戚に引き取られながらも、学校に通うことを許されず、差別を受けて生きているまだ10歳にも満たない子どもたちがそこにはいました。

当時、アフリカの一般的な住民がエイズ治療薬を受け取るとはまだ難しく、ケニアやウガンダでもそれぞれ年間10万人近い人々がエイズで亡くなっていました。エイズは「死の病気」と恐れられ、エイズ患者やHIVに感染した人々が差別をされて暮らさなければならぬ状況でした。親をエイズで亡くした子どもたちは行く場所がなく、やっとたどり着いた親戚の家でも、エイズの親の子どもという理由で簡単には受け入れてもらえない状況でした。

「学校に行きたい。友達がほしい。」

この頃に出会ったエイズ孤児の一人がわたしたちにそっと伝えてくれた言葉です。親をエイズで亡くした子どもたちでも学校に通えるという当たり前の環境を作りたい。そんな思いとともにわたしたちはエイズ孤児を支援してきました。

2000年代後半には、アフリカでエイズ治療薬が普及したことで、エイズを原因に亡くなる人の数も徐々に減少し、エイズ孤児を取り巻く状況は変わっていきました。両親ふたりともエイズで亡くすのではなく、片親が残り、シングルマザーやシングルファザーに育てられる子どもを目にするようになりました。

片親で体調も不安定なため、家計は安定せず、教育費を払えずに留年や中退を余儀なくされる子どもたちがいます。エイズに対する差別意識はまだ残っており、親のエイズを理由に、近所の人や学校の友達から差別を受ける子どもたちがいます。他の子どもたちと同じような明るい未来を築けずにいます。エイズに影響を受ける子どもたちが未来を切り拓ける社会を作りたい。環境が変わってきても、わたしたちの思いは変わらずにエイズ孤児を支援する活動を続けています。

### エイズ孤児とは

国際的にはエイズ孤児は、「片親または両親をエイズで失った18歳未満の子ども」と定義されています。世界には1780万人のエイズ孤児がおり、90%がアフリカに暮らしています。ケニアとウガンダにはそれぞれ100万人のエイズ孤児がいます。(UNICEF,2013)





【プラスのビジョン】  
 HIVやエイズに  
 影響を受ける子ども  
 たちが未来を切り  
 拓ける社会

エイズ孤児支援NGO・PLASは持続可能な開発目標SDGsを支援しています

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

<p>1 貧困をなくそう</p>	<p>2 飢餓をゼロに</p>	<p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	<p>4 質の高い教育をみんなに</p>	<p>5 ジェンダー平等を実現しよう</p>	<p>6 安全な水とトイレを世界中に</p>
<p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p>	<p>8 働きがいも経済成長も</p>	<p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>	<p>10 人や国の不平等をなくそう</p>	<p>11 住み続けられるまちづくりを</p>	<p>12 つくる責任つかう責任</p>
<p>13 気候変動に具体的な対策を</p>	<p>14 海の豊かさを守ろう</p>	<p>15 陸の豊かさを守ろう</p>	<p>16 平和と公正をすべての人に</p>	<p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p>	<p><b>SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS</b></p> <p>2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です</p>



## 現地の人々のちからを信じて－わたしたちが取り組んでいること

わたしたちの活動するケニア共和国とウガンダ共和国は、エイズに影響を受ける子どもや住民が多い国です。HIV陽性者の人口はそれぞれ100万人を超え、世界で上位10ヶ国に入ります。こうした国ではエイズによる死亡も多く報告されています。エイズで親を失った子どもやエイズに影響を受ける貧困家庭の子どもたちは、経済的困窮、家事負担、留年や中退、周囲からの差別や嫌がらせなど、学齢期に様々な課題に直面しています。

プラスではこうした環境に置かれた子どもたちの健全な発達や将来のため、第一に保護者に働きかけ家庭環境を改善し、第二に子どもたちに働きかけ子ども自身の人生を切り拓く力を育てます。また、現地のパートナー団体や行政と協働し、困難を抱える子どもや家庭に対するサービスが地域で維持・発展できる仕組みができるよう取り組んでいます。

これまでエイズに影響を受ける家庭を直接支援する事業で、シングルマザー約100名、子ども約300名を支援してきました。みなさまからのご支援に感謝申し上げます。

ケニアやウガンダの村の生活は、わたしたち日本人が想像するより、ずっと困難な状況にあります。そんな環境でも、ひとりひとりがより良く生きていくために、現地の人々のちからを信じ、それを高め・育てる支援を行っています。ときにはうまくいかないこともあります。根気よく諦めずに、現地の人々の声に耳を傾け、一緒に歩んでいきます。

### 家庭のちから

プラスでは2014年から家庭のちからを高める支援を続けています。困難な状況でも子どもたちを自分の手で育てたいという気持ちはどんな親も持っているものです。エイズや貧困に影響を受けるシングルマザーの経済力を高める支援を行っています。

- ウガンダ共和国ルェロ県におけるHIV陽性シングルマザーのカフェ・ビジネスによる生計向上を通じたエイズ孤児支援事業
- ケニア共和国ホマベイ郡におけるHIV陽性シングルマザーの養鶏ビジネスによる生計向上を通じたエイズ孤児支援事業
- ケニア共和国ホマベイ郡における野菜と樹木の栽培を組み合わせた農業活動の導入を通じた片親家庭の生活向上支援事業

### 子どものちから

プラスでは今年度より子どものちからを育てるカウンセリング事業を開始しました。教育を受けられるだけでなく、自分自身で未来を切り拓いていくためには、将来の計画や準備を早い段階で始め、困難な状況の中でも諦めない姿勢が必要です。

- ケニア共和国ホマベイ郡における子どもと保護者に対するライフプランニング支援事業

### パートナー団体 のちから

地域の課題を継続的に解決し、家庭に支援を届けるためには、現地の人々の手で行うことがより効果的です。こうしたパートナー団体のちからを育てていけるよう、事業づくりから積極的に参加を促します。

- [ウガンダ共和国のパートナー団体]
- Nyimbwa Muluti-purpose Organization of People living with HIV/AIDS
  - Kayunga Friendship and Development Association
- [ケニア共和国のパートナー団体]
- Bessa Integrated Development Programme
  - Victoria Agricultural and Environmental Conservation Organization





### シングルマザー家庭の学費未払い

ウガンダでは初等教育（小学校に相当、7年制）の中退が社会課題となっており、初等教育の総修了率（Gross Graduation Ratio）は54.38%（2011年）です（UNESCO Institutes for statistics）。実に半分の子どもしか小学校を修了できません。家庭の経済的な事情が中退の主な原因で、HIV陽性のシングルマザー家庭では収入が少なく子どもの中退や学費未払いによる休学が多く見られます。

### 事業の目的

HIV陽性シングルマザーが食品販売ビジネスのスキルを獲得することで、収入が向上し、子どもたちの教育費を安定して捻出できるようになる。

### 活動内容

ビジネス立ち上げに必要な研修の提供、食品調理やカフェ運営に必要な物品を供与しました。①1期目、2期目で各6家庭を支援しています。②研修では、ビジネス管理、会計、栄養・衛生、調理（一般食品、ベーカリー、ドリンク）を指導しました。③研修後、オープン、冷蔵庫、ブレンダー、調理器具、食器類、テーブル、イス等、調理・販売に必要な物品を支援しました。



事業名：ウガンダ共和国ルウェロ県におけるHIV陽性シングルマザーのカフェ・ビジネスによる生計向上を通じたエイズ孤児支援事業

事業地：ウガンダ共和国ルウェロ県

期間：第1期：2016年4月～2018年3月

第2期：2017年10月～2019年3月

連携：Nyimbwa Muluti-purpose Organization of People living with HIV/AIDS

資金協力：公益財団法人日本国際協力財団、株式会社ラッシュジャパン、企業・団体・個人からの寄付金

この事業はSDGsの目標を支援しています







### 事業でオープンしたカフェを訪問

この事業に参加するサリマさん。3人の子どもを育てながら、ブタンザという町で開いたお店を切り盛りしています。彼女の店を訪問すると、忙しそうに準備をしていました。「ようこそ！」と笑顔で迎えてくれました。そして、次から次へと料理が運ばれてきました。

「マトケ」と呼ばれるウガンダ料理の代表的な主食のひとつ（で調理用のバナナを蒸したもの）や、ビクトリア湖取れた魚にピーナッツソースをかけたもの、カボチャやサツマイモといったなじみのある食材を使ったメニューも。

食後、店を後にしようとする時、サリマさんに「今日は来てくれてありがとう」と英語で話しかけられました。

### スタッフの感じ取った変化

カフェ・ビジネスを始めて約1年、この事業を担当する現地パートナー団体のスタッフは、サリマさんの「ある変化」に気付きました。

事業に参加する前は、彼女は自分の名前をしっかりと書くことができず、自信がない様子が見受けられました。事業に参加して自分のお店を切り盛りするようになってからは、自分から「ここを改善してみたい」と提案をしたり、積極的に英語で話しかけようとするようになったそうです。



### 地域の中で必要とされ、育まれる自信と自立

カフェ・ビジネスを通して、読み書き、調理、接客、会計管理を学んでいくお母さんたち。おいしい料理を提供してお客さんが来ることで、「地域の中で自分が必要とされる」ということが自信にもなっているようです。

地域の人にとって役立つスキルを持ち、周りから必要とされること。そして、自分の力で収入を得て自立していくことが、その人の自信となる。たとえHIVと共に生きてゆくことになっても、自分と子どもたちの将来に自信を持ち、健康に暮らし、地域の中で緩やかなつながりを育みながら生きていくことが、子どもたちの未来を切り拓くことにつながる。

プラスが取り組む生計向上支援事業の意義の一つを、サリマさんの変化を通して教えていただいたように感じました。





### 演劇ワークショップによる課題分析の試み

プラスは2013年からウガンダのジンジャ県でHIV陽性のシングルマザーによる自助グループと活動を続けてきました。2017年、今後の活動を計画するワークショップを開催しました。支援事業について話すのではなく、コミュニティの課題とそれらをどのように改善したいかというビジョンの作成から始めました。彼女たちが積極的に関わられるよう演劇によって課題を洗い出すステップを踏みました。その結果、子どもの教育と発達、小規模ビジネス、農業の3テーマを特定し、2018年度には農業の分野で新しい事業を始める予定です。



ワークショップが終わると「このミーティングはとても勉強になった」という感想がメンバーから聞きました。自分たちで話し合い、自分たちで決め、具体的に行動を取り、試行錯誤を繰り返す中で、望ましい状態につながっていくので、その最初の一步を踏み出すことができました。「支援」や「新しい機材」が欲しいという声もありましたが、今回のワークショップを通して、自分たちで変えられることがあるということに、彼女たち自身が気づいたはずで、それが「勉強になった」という感想に表れていると感じています。

### HIV陽性者にとって農業の持つ意味

ウガンダでは2016年に旱魃があり、多くの貧困家庭が影響を受けました。主食のメイズの害虫も流行し、食糧価格が高騰しました。こうした状況はHIV陽性者にとってより重大です。HIVウイルスは変異性が高く、HIV治療薬を正しく服用しないと、薬剤耐性の獲得が起こることがあります。しかし、HIV治療薬の副作用として、空腹時の服用で気分が悪くなり、正しく服用できないことがあります。旱魃や食料価格の高騰によって、十分な食糧を得られないために、リスクを抱えているのです。そこで、HIV陽性者家庭の安定した食糧や収入の確保のために、第一に取り組むテーマとして農業を選択しました。





## エイズ孤児の進学の問題

ケニア共和国ホマベイ郡はHIV感染率が25.7%と国で一番高い地域です。エイズで亡くなる方も多く、働き手を失うことで家庭の貧困に結び付きます。夫を亡くしたシングルマザーは必要な教育費を賄うことができず、子どもたちは学校を中退するケースが見られます。プラスが現地で実施した調査では、エイズで親を亡くした子どもの45%がセカンダリースクールに進学できずにいました。これは全国平均の28%よりも高い数字です。

## 事業の目的

シングルマザー家庭の経済力を高め、子どもたちが学校に通い続けられる

## 活動内容

シングルマザーが養鶏ビジネスをスタートするために必要な研修と鶏舎の建設、初期費用を9家庭に提供しています。鶏舎の建設では補修作業を自分たちでできるよう彼女たちの力も借りました。現地の家畜局職員による研修後、ヒナを配布し、家庭単位で飼育を継続しています。

## ヒナの世話に熱心なお母さん

ヒナを心待ちにしていたヘリダさん。この地域に暮らし、近くの診療所で保健ボランティアもしています。5人の子どもを養育しています。ヒナが届いてから最初の2週間は気になって2時間おきに起きては様子を見たり世話をしたりしていたため、よく眠れなかったそうです。ある程度大きくなってくると、ようやく眠れるようになったと教えてくれました。



事業名：ケニア共和国ホマベイ郡におけるHIV陽性シングルマザーの養鶏ビジネスによる生計向上を通じたエイズ孤児支援事業

事業地：ケニア共和国ホマベイ郡

期間：2016年6月～2017年12月

連携：Bessa Integrated Development Programme、家畜局

資金協力：企業・団体・個人からの寄付金

この事業はSDGsの目標を支援しています







## 農業の収穫や収入が少ない

片親家庭を対象に現地で実施した調査で、農作物で収入を得ている家庭は全体の約15%にとどまり、各家庭の月収に占める農業系収入は約28%でした。ここ数年、雨期に降る雨量が不安定で、2016～2017年に発生した早魃では農作物の不作などの影響を受けました。

また「過去6ヶ月間に家計が苦しく基礎支出ができなかった」ことが「よくあった」と回答した家庭は55.6%に上り、他の地域の29.6%と比べ高い割合でした。自家消費作物の栽培も困難な家庭があり、食糧不足やベーシックニーズを満たせない現状があります。

## 樹木の伐採が続く地域

さらにこの地域では調理燃料として自生する樹木が伐採されています。長い月日のうちに草本や樹木が減り、土壌がむき出しになり、土壌侵食も見られます。樹木は長期的に、土壌の安定化、土壌改善、家具などの木材利用、果樹、薬用、生態系の保全に効用がありますが、人口圧により伐採が続けば、この地域全体の持続可能な生活が成り立たなくなることも予想されます。



事業名：ケニア共和国ホマベイ郡における野菜と樹木の栽培を組み合わせた農業活動の導入を通じた片親家庭の生活向上支援事業

事業地：ケニア共和国ホマベイ郡

期間：第1期：2017年4月～12月

第2期：2018年1月～12月

連携：Victoria Agricultural and Environmental Conservation Organization、森林局

資金協力：日蓮宗あんのん基金、企業・団体・個人からの寄付金

この事業はSDGsの目標を支援しています







## 事業の目的

野菜と樹木を組み合わせた農業活動によって、必要な栄養のうち家庭の畑で収穫できる野菜の量や種類を増やし、自家消費をしたり、余剰分は販売したりすることで、基礎支出を減らし、教育支出を向上させ、孤児と脆弱な状況にある子どもたち（OVC）を抱える片親家庭の生活が向上する

## 活動内容

この事業では受益者家庭が野菜と樹木を組み合わせた農業活動を開始できるよう支援を行います。野菜は現地の人々に広く知られているもので、その葉やツル、マメを食用にするものです。地域で昔から栽培され、食べられてきた野菜は、乾燥や病気にも比較的強いいため、肥料や農薬をほとんど必要としません。そのため貧困家庭でも費用をかけずに育てることができる有用な農業活動です。

一方で、住民の話では、この地域ではヤギやウシの家畜放牧によって野菜や灌木が食べられる被害が出ており、野菜栽培に積極的でない理由となっていることが分かりました。そこで事業で、各家庭に農業用のフェンスを設置し、そのフェンス内で野菜と樹木を組み合わせて植えます。フェンスによって住民の野菜の栽培の積極性を上げることができ、さらに樹木を組み合わせることで、長期的に家庭や地域の環境改善につながることを期待しています。



## 野菜の収穫で夢を広げる

事業に参加するパメラさんは、初めての野菜の収穫で得た2,500シリング（約3,000円）の使い道を教えてくれました。まず子どもの学用品を買い、試験料を払いました。勉強

強をがんばってクラスで2番の成績を取った子どもにはご褒美としてお小遣いをあげました。さらに、次に植える野菜の種を買うために貯金をし、残りは食糧や日用品を買うために使いました。パメラさんは「急な出費や子どもの将来の学費のために、もっと働いて貯蓄をしていきたい」と前向きに話をしていました。事業を通して、収入を得る手段やスキルを得たことで、母親としての彼女の夢が広がっていきます。

## 森林局の協力を得て進める事業

事業の技術面では、受益者への研修などで現地の森林局の協力を得ました。フェンス内に植える樹木の種類選びも相談をして進め、マンゴー、パパイヤ、建築用木材となる樹種、土壌改善につながる樹種を組み合わせるようになりました。

備考：ケニアの森林はKenya Forest Service（ケニア森林公社）が管轄しており、樹木に関する相談ができます。各地域に事務所を置いています。





### 中退による貧困の連鎖

事業を実施する地域は、漁業も盛んな地域ですが、漁業を営まない住民は、乾燥した土地で暮らし、小規模ビジネスや薪・石炭売りをして暮らしています。特に伴侶を失ったシングルマザー家庭の生活は苦しく、子どもたちはセカンダリースクール進学が難しいため、例え進学しても中退してしまうことが多いのが現状です。一方で、学校教育の中ではキャリア教育は限定的で、中退した後の人生を考え、計画することができずにいるため、貧困の連鎖が課題となっています。保護者は子どもの発達や教育に必要な役割を知る機会がないため子どもへの働きかけが十分にできていません。

### 事業の目的

子どもたちが自身の置かれた状況に屈せず、自ら未来を切り拓くために必要なスキルを獲得する

#### セカンダリースクール修了の高いハードル

ケニアではセカンダリースクールへの進学率は75%、そのうち卒業できるのは53%。セカンダリースクールに行かない子どもを加えると修了率は子ども全体の約40%です。

### 活動内容

事業に参加する30家庭の子どもと保護者にカウンセリングを提供します。

- ①モジュール開発：現地のパートナー団体と目的に沿ったカウンセリング・モジュールを開発しました。受益者が主体的に学びを得られるよう「アクティブ・ラーニング」手法を取り入れました。
- ②カウンセラー研修：モジュールに沿ったカウンセリングが提供できるようパートナー団体スタッフ4名にカウンセラー研修を行いました。
- ③カウンセリング：子ども（プライマリースクール高学年が対象）にはキャリア発達を促すカウンセリングを、保護者には子どもの発達や進学、家計管理に関するカウンセリングを提供します。カウンセラーと受益者の1対1のセッションで、1シリーズ全7回の内容です。
- ④キャリアトーク：職業人からキャリアパスについての講演を聞くキャリアトークを行いました。
- ⑤インタビュー調査：事業実施の前後でインタビュー調査を行い、受益者の変化を調べました。子ども、保護者共に期待した変化が現れていることが確認されました。





## 将来に向かって努力することを学んだ

事業に参加するコリンズ君（14歳）は、きょうだいの中では年長ですが勉強や家の手伝いをせず、学校から帰ると外で遊ぶ毎日でした。母親のミリセントさんはHIV陽性者で、夫を亡くし、経済的に苦しい日々を送っていました。これまでもコリンズ君が勉強に集中するよう試みましたがうまくいきませんでした。

2016年、コリンズ君とミリセントさんは事業に参加することになりました。カウンセリングを通してコリンズ君は自分の夢を叶えるために継続した努力が必要であることを悟りました。ミリセントさんは事業で学んだコミュニケーションスキルでコリンズ君に働きかけました。2017年4月、カウンセラーがミリセントさんを訪問すると、コリンズ君の変化を誇らしげに話してくれました。放課後、学校に残り勉強を続け、クラスで12番だった成績が4番に上がりました。生活態度も良くなり、担任の先生からも褒められたそうです。

コリンズ君の夢は航空技術者になることです。ミリセントさんは、コリンズ君がこれからも勉強に励んでくれることを願っています。

## 自分と父親の関係を繰り返したくない

エリザベスさんはこの事業に参加するシングルマザーの一人です。彼女はプライマリースクールの6年生のときに妊娠しました。それを知った彼女の父親は激怒し、彼女に冷酷な態度を取りました。やむを得ず学校を中退し、結婚しましたが、結婚した相手は酒飲みで働かず、小さい子どもを抱えた彼女が一人で家計を支えました。夫はしばらくして亡くなりました。父親と良い関係を築けなかったため、彼女自身も自分の子どもとの関係に自信を持てずにこれまでやってきました。

カウンセリングを受け、エリザベスさんは自分と父親のような関係を、自分の子どもには繰り返したくないと言いました。性教育も子どもにとって必要な知識なので、事業で学んだことを子どもたちに伝えていきたいと話してくれました。彼女は事業に参加できたことをとても感謝しています。

ケニアのお母さんたちも子育ての悩みを抱えていることを、事業を通して改めて認識しました。私たちは、引き続き、この地域でカウンセリングを提供していきます。



事業名：ケニア共和国ホマベイ郡における子どもと保護者に対するライフプランニング支援事業

事業地：ケニア共和国ホマベイ郡

期間：第1期：2016年8月～2017年9月

第2期：2017年10月～2018年7月

連携：Victoria Agricultural and Environmental Conservation Organization、Bessa Integrated Development Programme、教育局

資金協力：公益財団法人庭野平和財団、一般財団法人まちづくり地球市民財団、企業・団体・個人からの寄付金

この事業はSDGsの目標を支援しています







### 3つの事業評価

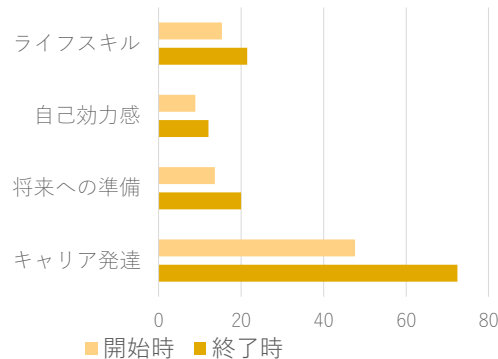
プラスでは事業評価を異なる3つの方法で行っています。プラスが主体となる事業運営の評価、受益者やパートナー団体の気づきを得るための参加型評価、そして成果や変化を測定するインパクト評価です。

### カウンセリング事業の成果測定

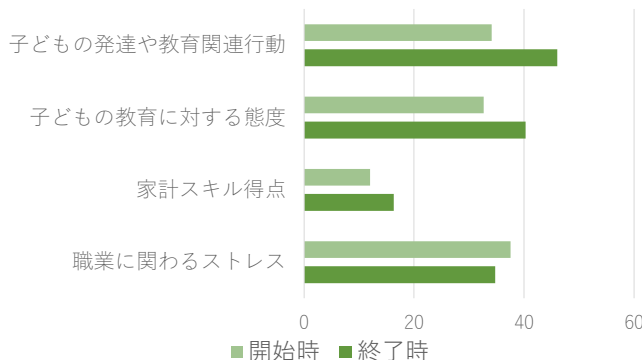
2016年度に開始したカウンセリング事業が1サイクルを終えたので事業の成果を測定しました。カウンセリング開始前と終了後に行ったインタビューデータを比較し、統計的に有意な変化が見られるかを調べました。その結果、子どもと保護者の両方で良い変化があったことが確認され、事業が成果を上げていることが分かりました。

こうしたインパクト評価やその結果は事業の質を高めるための取り組みで、受益者の方々により良い支援サービスを提供する助けになります。まだインパクト評価の実施は限定的ですが、引き続き効果の確かな事業を展開していきたいと考えています。

### カウンセリング前後の子どもの変化



### カウンセリング前後の保護者の変化



注：「職業に関わるストレス」は得点が低い方が良好状態





## パートナー型の事業展開

プラスは2014年からパートナー型の事業展開を進めています。プラスが設立から大事にしてきた「あげる支援ではなく、つくる支援」という活動方針を、より具体的に活動に反映させるため、現地に日本人駐在員を置かず、現地のパートナー団体のオーナーシップやキャパシティを強化しながら事業運営を行う体制を選択しました。

## なぜ中期ビジョンが必要か

これまで複数のパートナー団体と事業を実施してきましたが、事業の積み重ねの先にゴールがあるのではなく、ゴールを目指して事業を積み重ねていく必要があることに気づきました。そこで団体の理事2名（小島・一宮）が現地に渡航し、パートナー団体や受益者、地域のステイクホルダーと共にワークショップを開催し、プラスとのパートナーシップによって目指す社会や人々の変化（中期ビジョン）を協議しました。

中期ビジョンの作成にあたっては、セオリー・オブ・チェンジの考え方を採用し、地域課題の把握、理想的な状態、ドライバーの特定、課題解決の道筋のステップによって行いました。



## 理事として貴重な機会を得て

プラスでは普段、理事がパートナー団体とのやり取りをすることはありません。また限られた資金の中では、理事の渡航よりも事業担当の渡航を優先します。しかし、真のパートナー関係を築き、私たちの目指すパートナー型の事業をより良いものとするために、組織の経営者である理事2名が現地で活動できたことは大きな意味があります。理事としての役割を再認識したと同時に、これまで見ていなかったプラスの課題も見えました。貴重な機会を今後の組織運営に生かしていきたいと考えています。今後も「プラスのパートナー型」を洗練させていきます。





# 支援者のみなさんと活動をつくる

## Positive Living (ポジティブ・リビング)

ポジティブ・リビングとは、プラスがこれまでの活動を通して現地の人たちから学んだことです。困難な中でも、希望を失わずに前を向いて生きる姿勢で、プラスという団体名 (Positive Living through Aids Orphan Support NGO) にも込められています。2017年度は、このポジティブ・リビングに基づいて、プラスの活動の軸として大事にする6つのバリュー (価値観) を決めました。

ここには、「プラスに参加するみなさんと課題解決に向かっていきたい」という私たちの願いが込められています。ウガンダとケニアで地域住民の自立を優先し、持続可能な活動を提案・展開することに加え、日本のみなさんと新しいことや困難なことにも挑戦しながら常に成長していくこと、ワクワクできる活動を展開し、関わる人たちのやりがいを大事にすること、そして活動する私たち自身も持続可能であることを目指します。2017年度は72名のボランティア・プロボノ、10名のインターン生が活動に参加し、講演やイベントを通して414名にエイズ孤児の問題を伝えることができました。2018年度は、地方での活動展開やIT活用などを通してさらに多くの人たちと活動を展開してまいります。

**ワクワク**

ワクワクできる活動を展開します

**革新**

新しい事や困難なことにも挑戦していきます

**自立**

住民の自立を優先します

## プラスのポジティブ・リビング

**やりがい**

関わる人たちのやりがいを大事にします

**成長**

成長をしていく努力をします

**持続可能**

持続可能な活動を提案します



## グローバルフェスタ2017に出展しました



9月30日・10月1日の2日間、お台場でグローバルフェスタが開催され、プラスも出展しました。プラスのブースは19名のボランティアとインターン生が中心となって運営し、ウガンダでエイズ孤児を育てるシングルマザーたちが手作りしたペーパービーズネックレスを通して、エイズ孤児が抱える課題や、活動の意義を伝えました。ボランティアをきっかけに定期的にプラスの活動に継続して参加される方々も生まれ、活動に参加する新たな仲間の輪が広がりました。2日間の売り上げは71,247円になりました。プラスの活動に大切にに使わせていただきます。



## 定例イベント「PLASRoom」を7回開催しました

エイズ孤児の問題について広く市民の皆さまに知っていただく機会を提供するため、月に一度開催しているイベントです。2017年9月からは東京・赤坂のヤフー株式会社さん本社「Yahoo! LODGE」で開催し、お仕事帰りの社会人、学生さんなど幅広いバックグラウンドの方々にご参加いただきました。



### 参加者の声

エイズ孤児の問題が深刻な問題だと感じました。寄付や、ボランティアという言葉は日常でも目にします。それでも行動できずにいた自分を感じ、今日からエイズ孤児の支援に少しでも携わりたいと思いました。

プラスの活動内容がストーリーと数値の両方で語られていてわかりやすかったです。事業に参加したことで自信をつけたというシングルマザーの話が心に残りました。



PLASRoomの魅力は少人数でじっくりと話を聞くことができること。これからも幅広い年代の方にエイズ孤児問題の現状を知っていただけるよう、イベントを行なっていきます。



国内事業担当  
下久 禰 愛



## 大学や企業での講演で315名にエイズ孤児問題を伝えました

複雑化する社会の中で、NPOの役割が一層期待されています。エイズ孤児の問題を広く伝えるとともに、プラスのこれまでの活動を通して得た知識や経験を日本社会へ共有・還元することで、様々な社会課題に取り組む組織や人々の一助になればと考えています。プラスではこれまで大学や援助機関、企業、修学旅行や総合学習、非営利組織での国際協力セミナー等で講演を行ってきました。



### これまでの講演実績（抜粋）

- 一橋大学法学部様
- 武蔵野大学法学部様
- 認定NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）様
- J.P.Morgan様
- 一橋大学国際・公共政策大学院様
- READYFOR株式会社様
- かながわNGO学びの会2017様（JICA横浜様による受託事業）

講演にご興味のある方、  
お問い合わせはこちらから



エイズ孤児 講演 検索

### 講演活動を聞いた参加者の声

エイズ孤児の問題が深刻な問題だと感じました。寄付や、ボランティアという言葉は日常でも目にします。それでも行動できずにいた自分を感じ、今日からエイズ孤児の支援に少しでも携わりたいと思いました。

企業で働きながら世界の子どものためにできることがあるのだと気づきました。「一步踏み出すことで変わる未来がある」という言葉を聞いて勇気が出ました。

プラスの活動内容がストーリーと数値の両方で語られていてわかりやすかったです。事業に参加したことで自信をつけたというシングルマザーの話が心に残りました。

卒業後は普通に企業で働くつもりでしたが、お話を聞いてみたいと思いました。いろいろな選択肢が将来にあることを知りました。

### 講演について

様々なご要望に合わせて、大学、企業、自治体、学生サークル、地域グループまで、ご関心のある方ならどなたでもご依頼いただけます。私たちがお話できる場がありましたらぜひお呼びください。

#### 講演テーマ例：

- ・エイズ孤児について
- ・プラスの活動について
- ・活動を始めた経緯
- ・アフリカのHIV/エイズ問題
- ・国際協力を仕事にする
- ・NGOと企業の連携
- ・インターンシップマネジメント
- ・働き方改革

## 社会課題の解決に取り組むNPOへ経験の共有をしています

海外や国内の社会課題解決に取り組む非営利組織に、プラスが培ったノウハウを積極的に共有しています。2017年度は6団体にデータベース活用、マーケティング、資金調達、人材育成などをテーマにノウハウの提供をさせていただきました。社会課題は単一の団体では解決することが難しいからこそ、組織の枠を越えて切磋琢磨しながらも互いに高めあっていくことが重要だと考えています。



# 活動の成果と課題をお伝えする 「ご支援者様Thanksパーティー」を開催しました



プラスをご支援いただいている皆さまに感謝の気持ちをこめて、9月25日に「ご支援者様Thanksパーティー」をヤフー株式会社様本社「Yahoo! LODGE」にて開催しました。Thanksパーティーは、参加者のみなさま、ボランティア、スタッフ全員で作ることができました。

今年度からは、私たちが活動するケニアを題材にしたワークショップや、インターン生によるプレゼンテーションなど、新しいプログラム内容にも挑戦。ワークショップは、「世界がもし100人の村だったら」を題材にしたプラスオリジナルの「ケニアがもし35人の村だったら」を参加者の皆さまと体験。プラスの活動地であるケニアをより身近に感じていただくことができました。また、代表・門田、事務局長・小島、海外事業マネージャー・巢内の3名による活動報告プレゼンでは、ウガンダ・ケニアから届いた最新レポートや写真をもとにした事業の成果や、プラスが抱える課題についてもお伝えし、参加者の皆さまからご提案いただく機会もありました。「ワークショップが楽しかった」や、「スタッフのみなさんと直接関わることができてありがたかったです。想いが伝わりました」など嬉しいご感想をいただきました。



以前から国際協力に関心がありました。これからも何らかの形で国際協力の分野に関わっていきたいという気持ちがあり、プラスの活動にボランティアとして参加を始めるきっかけとなりました。プラスの活動では、自分のできる範囲で無理なく参加することができ、日々いろいろなことを学ばせていただいています！

## 運営ボランティアの声



**高橋 直樹さん**  
2012年からプラスのボランティア・支援者としてイベントボランティアを中心に活躍。2017年度はイベント運営に計8回ボランティアとして参加。





プラスでは多くのボランティアが活動に参加しています。2017年度は72名のボランティアがプラスのイベント運営に参加し、ボランティアがリーダーシップをとって運営する物販プロジェクトでも様々な企画を立ち上げ実施しています。エイズ孤児問題を解決するには、市民のみなさんが問題を知り、共感し、プラスと行動することが重要と考えています。

## アフリカを身近に！ボランティアによる「物販プロジェクト」

社会人ボランティアを中心とする「物販プロジェクトチーム」の活動が本格的にスタートしました。週末にチームで集まり、ウガンダのシングルマザーたちが手作りしたペーパービーズネックレスの販売戦略や、ウェブショップの運営、外部イベントへの出展企画など活動のすそ野を広げています。運営を率いるのはプラス活動歴8年のボランティアスタッフ。SEやデザイナー、会社員、フリーランスなど多様なバックグラウンドの皆さんの企画力と実行力、熱い想いでプラスの活動を広げていただいています！



物販PJチームが企画・運営するチャリティWebショップでは、ウガンダのシングルマザーたちが手作りした商品をお届けいたします。

プラス チャリティー

検索

ボランティアをする理由も関わり方も皆それぞれ。特別なスキルがなくても、空いた時間を使ったり、些細でもできる事を積み重ねていくと、アフリカの子どもの笑顔にきっと繋がると思っています。多彩な人が集まるので、アイデアが出る度に企画やプロジェクトが、より魅力あるものに変化していく過程も、楽しみの一つです。

仕事では経験できない多様な活動と多様な人に出会えること。それがプラスでボランティアを続ける理由です。私にとってプラスの活動は、仕事などの垣根を越えてフラットに話せる場でもあります。ボランティアの関わり方は様々です。在宅でできることもあれば、何気ないおしゃべりからアイデアが生まれることも。ぜひ気軽に参加してみませんか？



平井 もり恵さん

2009年プラスのワークキャンプに参加。以後、学生スタッフとしてキャンペーン事業などで活躍。卒業後は仕事の傍らボランティアスタッフとして運営を支える。



野村 とし子さん

2009年からプラスのボランティアスタッフとしてウェブ制作や物販を中心に活躍。普段はSEとして働きながら、PLAS-tic Laboの統括を務める。



## ご支援者の主催でプラスの活動紹介イベントが開かれました

2017年8月、マンスリーサポーターとしてプラスを応援くださる甲斐雄一郎様をご自身の誕生日を記念して東京都内でプラスのためのチャリティーイベントを主催くださりました。「プラスとの出会い」「なぜプラスを支援するようになったか」「支援に参加して良かったこと」などを参加者の皆さまにスピーチされ、事務局長の小島からはウガンダとケニアの活動についてお話ししました。会場に集まった20名の皆さまから温かいご寄付もいただき、活動の輪を広げました。プラスでは、活動を応援・ご支援いただく皆さまによる主催イベントもお待ちしております。勤務先や学校、同窓会など様々な場で企画いただけます。



## 広がる支援の輪—札幌で新しい企画が実現しました



9月3日、札幌聖心女子学院中学高等学校のバザーで、プラスのペーパービーズネックレスを販売させていただき、授業内でプラスの活動についても紹介しました。この企画を実現させたのは、インターン生の藤原。母校に企画を提案し、ボランティアの声掛けから商品の選定/販売まで、主体的に進め、講演も自ら登壇。個人のアイデアと積極的な働きかけで実現した今回の新企画。プラスでは、「こんなアイデアあるけどどうだろう？」という支援者の方からの提案も募集中です。お気軽にご相談ください。



## チャリティー商品の委託販売が広がりました



2017年度はプラスのチャリティー商品の委託販売先が3つに広がりました。ウガンダのシングルマザーたちが手作りしたペーパービーズネックレスなどを販売いただいています。

エシカルペイフォワード様（東京・日本橋/写真上）は、オーガニック、フェアトレードなどのエシカル商品を世界・日本各地から集めたセレクトショップです。

WILL GALLERY様（東京・白金台/写真下）は、世界の女性がつくる「てしごと」のセレクトショップ。より良く、生きたい。より良い、暮らしをしたい。子どもたちにより良い人生を送ってほしい。世界の女性たちがハンディクラフトに込める様々なWILLが、日本に生きるわたしたちと その次の世代の WILLにもつながっていくと信じ、世界13か国の女性の雇用につながる商品をつくりてのWILLとともにお届けしています。

札幌在住のピアノ教師・曾根崎直子様には、ご自身が主宰されるシュタイナー教育に基づく芸術講座にてペーパービーズネックレスを委託販売いただきました。





## プラスの活動の原動力、インターンの活躍



プラスはこれまで40名のインターンが国内外の活動を支えてきました。2017年度は10名が日本事務局で活動。イベント企画・運営、チャリティオークション、海外事業の調査分析、企業連携など、職員の右腕・即戦力として組織を支えています。職員同様にプロジェクトを担当し、時には難しい判断や壁にぶつかりながらも大きく成長し、インターン卒業後は様々なフィールドで活躍する姿に、共感・応援をいただいています。

### プラスのインターン活動を振り返って

プラスでインターンをするまで“世界を変える”と聞くと、それは何かとても大きなことのような気がしていました。しかし、職員一人ひとりが問題解決に向け、現地の人々と共に課題に前向きに取り組み、人々の暮らしが改善されていく様子を間近で見て、世界はこうして変えることができるのだと実感することができました。インターン生としてこの活動に携わることができ、非常に光栄です。プラスで得た経験を糧に次へのステップを踏み出したいと思います。

プラスでは海外事業の補佐から企業連携など多岐に渡る業務に携わることができ、社会人経験のない自分にとってはどれも貴重で新鮮な経験となりました。インターンの立場など関係なく、自分のアイデアや提案にも耳を傾けくれるプラスのフラットな環境のおかげで、プラスのバリューの一つでもある前向きにチャレンジし、成長しつづけることの大切さと楽しさを実感することができました。



**有村 悠子さん**  
イベント企画立案から当日の運営までを一手に担う。グローバルフェスタでは責任者として19名のボランティアを率いるリーダーを務めた。



**佐谷 孝行さん**  
広報・海外事業・企業連携を担当。海外事業では現地パートナー団体との事業立案も。卒業後は青年海外協力隊として活動予定。

## 外務省NGOインターン受入先として国際協力を担う若手を育成しています



2017年6月より「外務省NGOインターン・プログラム」受け入れ団体に採択され、インターン松田が活動をスタートしました。このプログラムは、NGOへの就職を希望する若手人材のための門戸を広げると同時に、若手人材の育成を通じてNGOによる国際協力を拡充するため、インターン育成をNGOに委託し、育成にかかる一定の経費を支給するものです。松田は後輩インターン生の育成にも携わり、2018年度にケニア・ウガンダの事業地へ渡航を予定しています。

## スタッフの能力強化にも力を入れています

プラスは活動を担うスタッフの能力を強化することは、活動成果につながるため積極的に取り組んでいます。2017年度は、事務局長の小島と、海外事業マネージャー巢内が「外務省NGO海外スタディプログラム」の派遣員に採用され、海外研修に参加しました。このプログラムは日本の国際協力NGOの人材育成を通じた組織強化を目的とし、中堅以上の職員を対象にした研修プログラムです。小島は米国でのリーダーシップ研修JWLI (Japanese Women's Leadership Initiative) に参加。リーダーシップ理論と実践を学び、組織強化に活かしています。巢内は英国でNPOの組織強化を進めるINTRACのインパクト評価研修に参加し、学びを海外事業に活かしています。





## 世界エイズ孤児デーと世界エイズデーにチャリティーオークション開催

2017年度に行ったチャリティーオークションでは、45名の著名人にご協力いただき、総落札金額5,100,868円を達成しました。現地の支援活動に大切にに使わせていただくことができました。また著名人の方々がソーシャルメディアで発信いただき、エイズ孤児問題を広く周知していただきました。

ここに長年協力いただいている協力者の顔写真を入れる（10名程度、下の写真にある方は除く）

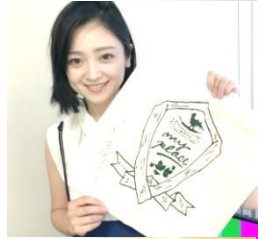
### チャリティーオークションとは



Yahoo!JAPANさんご協力のもとヤフオク!で5月7日の世界エイズ孤児デー、12月1日の世界エイズデーに合わせてプラスが年2回開催しているチャリティーオークションです。活動資金を集めるだけでなく、エイズ孤児問題を広く周知することもめざしています。漫画家の高橋留美子さん、ミュージシャンのSEKAI NO OWARIさんなど数多くの著名人のみなさまからご協力いただいています。サイン入りの色紙、トートバッグ、イラストやスポーツ用品などのアイテムのご提供と、エイズ孤児やプラスの活動へのメッセージをご協力いただいています。

### チャリティーオークションを実施するまでのプロセスは？

プラスではインターン生がチャリティーオークションを担当します。電話やメールで著名人のみなさまの事務所などにご連絡し、エイズ孤児の課題やプラスの活動をご説明して協力者を募ります。ご協力品を受け取り、写真撮影と出品ページを作成、ヤフオク!サイトで出品し、落札者様へ発送。このプロセスを約8週間くり返します。プラスのチャリティーオークションは、「日本からエイズ孤児問題のために力になりたい」というチャリティーの思いでご参加いただく著名人のみなさまや、キャンペーンを担当するボランティアに支えられています。



#### 担当者の声

チャリティーオークションはインターンが担当しますが、プラスの年間の経常収益の20%近くを占める大きなプロジェクトのため、とても責任ある仕事です。地道にご依頼電話をしてもなかなか協力いただける方が見つからないときは大変でした。しかし、その半面やり終えた後の達成感も大きく感じられます。また、現地からは遠い日本での活動にはなりますが、参加者の方々からプラスの活動に共感いただき、間接的にエイズ孤児への支援につながる、とても意義ある仕事です。

### チャリティーオークション2017にご協力いただいた著名人のみなさま

FLOWさん、mame&coさん、myさん、SEKAI NO OWARIさん、wakutaさん、アグリムさん、いしともこさん、いつきゆうさん、うとまるさん、カナヘイさん、サタケシュンスケさん、スザンヌさん、ちばてつやさん、つるの剛士さん、ナガノさん、のぶみさん、ポテ豆さん、リリー・フランキーさん、赤星憲広さん、安達祐実さん、安田菜津紀さん、井上きみどりさん、一ツ山チエさん、二ノ宮知子さん、古屋雄作さん、杉山愛さん、高橋留美子さん、広末涼子さん、紺野美沙子さん、岸田護さん、山寺宏一さん、植田まさしさん、大島祐哉さん、丹羽孝希さん、田中雅美さん、渡辺真理さん、和田豊さん、土屋アンナさん、東尾理子さん、石田純一さん、檜崎正剛さん、北見けんいちさん、木野下円さん、有森裕子さん、澤穂希さん、寛美和子さん。（計45名、順不同）



## ご支援・ご協力いただいた法人のみなさま

ご寄付・ご協賛・物品寄贈・その他の温かいご支援ありがとうございます

株式会社セールスフォース・ドットコム

株式会社アイエイエフコンサルティング

株式会社GME

THE AMMADO Foundation

認定NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）

ソフトバンク株式会社

ヤフー株式会社

マイラン製薬株式会社

株式会社マルケト

株式会社イオンフォレスト（ザ・ボディショップ）

株式会社ラッシュジャパン

株式会社イデアインターナショナル

株式会社バリューブックス

パッケージアート株式会社

※順不同

## 助成金・業務委託

特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク（NGO組織強化支援事業助成金）

宗教法人日蓮宗（あんのん基金）

外務省／国際協力NGOセンター（NGO海外スタディ・プログラム）

外務省／公益社団法人青年海外協力協会（NGO海外インターン・プログラム）

公益財団法人日本国際協力財団（国際協力NPO助成（一般型））

公益財団法人庭野平和財団（公募助成）

一般財団法人まちづくり地球市民財団（国際協力助成）

株式会社ラッシュジャパン（チャリティバンク）



# 写真でふりかえる 2017年度



クラウドファンディング目標達成（2016年12月）



理事がパートナー団体と中期ビジョン作成（2017年2月）



カユンガグループとワークショップ開催（2017年2月）



組織の強みワークショップ（2017年5月）



物販ワークショップ（2017年6月～9月）



海外事業マネージャーが現地出張（2017年2月・7月）



グローバルフェスタ出展（2017年9月）



Thanksパーティー開催（2017年9月）



## 2017年度会計報告

法人名： 特定非営利活動法人エイズ孤児支援NGO・PLAS

## 活動計算書

2016年10月1日～2017年9月30日まで

(単位:円)

科目	金額	
<b>I 経常収益</b>		
1. 受取会費		
正会員受取会費	54,000	54,000
2. 受取寄附金		
受取寄附金	15,632,137	15,632,137
3. 受取助成金等		
受取民間助成金	1,245,312	1,245,312
4. 事業収益		
普及啓発事業収益	402,427	402,427
5. その他収益		
受取利息	549	549
経常収益計		17,334,425
<b>II 経常費用</b>		
1. 事業費		
(1)人件費		
給料手当	8,447,934	
法定福利費	656,290	
人件費計	9,104,224	
(2)その他経費		
業務委託費	2,728,789	
印刷製本費	248	
会議費	32,755	
旅費交通費	1,645,528	
通信運搬費	780,632	
消耗品費	277,115	
賃借料	27,324	
保険料	74,290	
諸会費	20,000	
研修費	22,000	
支払手数料	949,859	
新聞図書費	4,164	
雑費	10,376	
その他経費計	6,573,080	
事業費計		15,677,304
2. 管理費		
(1)人件費		
給料手当	903,618	
法定福利費	77,686	
人件費計	981,304	
(2)その他経費		
印刷製本費	72,504	
会議費	2,514	
旅費交通費	57,478	
通信運搬費	94,817	
消耗品費	27,819	
水道光熱費	57,735	
地代家賃	1,221,668	
諸会費	10,000	
研修費	21,600	
支払手数料	389,180	
雑費	△ 6,504	
その他経費計	1,948,811	
管理費計		2,930,115
経常費用計		18,607,419
当期経常増減額		△ 1,272,994
<b>III 経常外収益</b>		
<b>IV 経常外費用</b>		
税引前当期正味財産増減額		△ 1,272,994
法人税、住民税及び事業税		0
前期繰越正味財産額		7,485,519
次期繰越正味財産額		6,212,525



## 監査報告書

特定非営利活動法人エイズ孤児支援 NGO・PLAS

代表理事 岡田 瑠衣子様

2018年4月19日


監事 藤本 俊明

私は、特定非営利活動促進法第18条の規定に基づき、特定非営利活動法人エイズ孤児支援 NGO・PLAS の2017年度（2016年10月1日～2017年9月30日）の業務及び会計の状況について監査を実施いたしました。

監査の方法は、重要な会議の議事録その他の重要資料を閲覧するほか理事から事業の報告を聴取し、また財産の状況については証拠書類の閲覧、照合、質問等を行いました。

監査の結果、法人の業務の執行に関しては法令及び定款に基づき適正に執行され、会計処理は NPO 法人会計基準及び一般に公正妥当と認められる会計の方法によって適正に処理されているものと認められた。

以上

藤本俊明 



## 団体概要

- 団体名： 特定非営利活動法人 エイズ孤児支援NGO・PLAS  
英語名 AIDS Orphan Support NGO PLAS
- 設立年月日： 2005年12月9日  
法人設立：2013年3月11日（東京都より特定非営利活動法人として認証を受ける）
- 代表理事： 門田瑠衣子  
役員： 門田瑠衣子（代表理事）／ 谷澤明日香（副代表理事）／ 小島美緒（事務局長理事）  
大島陸（常任理事）／ 一宮暢彦（常任理事）／ 藤本俊明（監事）
- 活動地域： ウガンダ共和国、ケニア共和国  
事務所： 本部（日本 東京） ケニア事務所（ケニア共和国キスム郡）

## わたしたちと一緒にエイズ孤児の未来を守りませんか？

マンスリー  
サポーターになる

月々1000円から始められる、  
継続的なご寄付を募集しています！

銀行振込で  
寄付をする

いつでも、自由な金額を寄付していただけます。

※口座名義人は「特定非営利活動法人エイズ孤児支援NGO・PLAS」または「エイズ孤児支援NGO・PLAS」

ジャパンネット銀行 すずめ支店  
(普) 2340606

三菱東京UFJ銀行 目黒支店  
(普) 0271058

みずほ銀行 目黒支店  
(普) 1123267

古本で  
寄付をする

古本の査定相当額をプラスの活動に  
寄付することができる仕組みです

お買い物で  
支援する

プラスの運営するオンラインShopで  
アフリカ雑貨をご購入いただけます

詳細はホームページをご覧ください



エイズ孤児

検索



特定非営利活動法人 エイズ孤児支援NGO・PLAS 年次報告書 2017

2018年1月4日発行 発行人：特定非営利活動法人エイズ孤児支援NGO・PLAS

〒110-0005 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne 秋葉原ビル7F

TEL: 03-6803-0791 E-MAIL: info@plas-aids.org

HP: www.plas-aids.org/ Facebook: NGOPLAS



エイズ孤児支援NGO・PLASは、市民や社会から信頼された組織として発展していくため、アカウントビリティ・セルフチェックに取り組み、適正に自己審査したことがJANICにより認められています。